寺の町・荒町（あらまち）　たんけんポイントの説明

平成 18 年 3 月版 / NPO 法人小諸町並み研究会

★たんけんマップで番号の場所をみてください。

1　熊野神社（くまのじんじゃ）（今から 300 年前）

今から 800 年ほど前に開かれ、今から約 300 年前の元禄（げんろく）16 年（1703 年）にここに移（うつ）されました。
荒町、与良、南町の産土神（うぶすながみ）（守り神）で、いくさの神様です。
江戸時代に、洪水（こうずい）で大蛇（だいじゃ）がここに流れつき、お宮の下の大石につきあたり、また流れていったとか。まちの人たちは、「熊野神社（くまのじんじゃ）の神様が姿（すがた）をかえてあらわれた」と考えて、いっそうこの神社をだいじにするようになったと言い伝（つた）えられています。
この神社や、和歌山県（わかやまけん）の熊野の神を本宮（ほんぐう）としています。
熊野の神は、平安時代のころから朝廷（ちょうてい）や貴族（きぞく）にあつく信仰（しんこう）され、その後、全国各地に社がつくられるようになりました。

2　八幡神社（はちまんじんじゃ）（江戸のはじめころにできた）

今から 393 年前（1608 年）、その時の小諸の領主（りょうしゅ）・仙石秀久（せんごくひでひさ）が、戦いの神として望月からここにお呼（よ）びした神社です。
ここには、仙石秀久の鎧（よろい）も奉納（ほうのう）されています。この本殿（ほんでん）は、その時つくられた部分がかなり残っていると言われているたいへん古いものです。
「三間社柿葺（さんげんしゃこけらぶき）の流（つく）れ造り」という作り方で、屋根（やね）の曲線が美しく、こんなに大きな建物でも軒（のき）を薄（うす）くしているので、すっきりしたデザインであると評価（ひょうか）が高い建物です。
境内（けいだい）には樹齢（じゅれい）400 年ほどの大ケヤキが並（なら）び、四季の表情（ひょうじょう）が豊（ゆた）かです。

3　八朔相撲（はっさくずもう）

戦（たたか）いの神様である八幡様（はちまんさま）によろこんでもらうために、江戸時代のはじめから行われているまちの子どもたちの相撲（すもう）大会です。
この神社の祭日は、昔は毎月旧暦（きゅうれき）の８月朔日（さくじつ）だったので「八朔相撲」の名前がつきました。
江戸時代の中ごろには殿（との）さまも見にきたようで、近くの村や町から豆力士（まめりきし）が集まりました。

江戸の相撲のスーパースターだった「雷電為衛門」も、子どものころ、となりの東部町から「八朔相撲」にやってきました。ここでとった相撲が、はじめての試合だったということです。

八朔相撲の「どんす」
土俵入り(相撲がはじまる前の儀式）の時に力士がつける化粧まわしで、絹でできたものを「どんす」といいます。
荒町の旧家は、男の子が生まれると「どんす」を作ったそうです。
八朔相撲には、いろいろな地域から男の子が集まり、その中で体格のいい子が「どんす」をつけて土俵入りをします。

4　全宗寺

1642 年（江戸時代中ごろ、今から 361 年前）に、ここに開かれたお寺。海應院の末寺。曹洞宗で、本尊は「観世音菩薩」。境内にある岩船地蔵尊は、霊力の強いお地蔵さまだということです。

5　福徳稲荷

この福徳稲荷ができたのは、江戸時代のおわり、今から 150 年くらい昔です。「稲荷」戦争前（50 年くらい前）までは、光岳寺の松井稲荷とともに、毎月縁日が開かれ、まわりの村からもたくさんの人が集まってにぎわったそうです。
福徳稲荷は、商売繁盛、個人の幸福をもたらせてくれるそうです。
白いきつねは、お稲荷様のお使いです。その昔、荒町にときどき火事があったのですが、その時きつねが鳴いて知らせてくれたので、大火事にならなかったそうです。ですから、火伏の神としても信仰を集めています。

２つのお地蔵さま
福徳稲荷の左が「岩舟地蔵（別名、夜泣き地蔵)」、右が「水子地蔵」です。

6　海應院

1540 年ごろ（戦国時代）に、今の馬場裏の奥に開かれたお寺。1650 年ごろ（江戸時代のはじめ、今から 354 年前）にこの場所に移されました。
二代将軍・徳川秀忠が、関ヶ原に向う道を真田昌幸にはば

まれて小諸に足どめされた折、海應院住職が間に入って和睦（戦わない約束をする）が成立したということです。将軍はそのお礼に、寺に「下馬札」と「将軍家の印の入ったうちわ」と高価なお茶碗をくださいました。これがあるために、参勤交代の大名といえども、海應院の前では駕籠や馬から降りて通行しなければならなかったそうです。
参道は、禅寺らしく、街道から入って山門をくぐり一度くの字に曲がり、もう一度中門をくぐって本堂に向います。参道には、春先になると天然記念物のコモロスミレが咲きます。境内の樹齢約 370 年の「潜龍の松」もすばらしいです。

7　宗心寺の天神様

宗心寺の境内に天神様の祠があります。天神様は学問の神様で菅原道真公をお祀りしています。正しくは天満宮と申します。菅原道真公は非常に学問にすぐ優れたかた方だったので学問の神様とされるようになったのです。宗心寺には寺子屋があった時代がありますのでそのころ寺子屋の子供たち達のためにこの天神様の祠がお祀りされたと思われます。
この天神様の例祭は七月二十四日のよる夜に男の子たち達によって行なわれました。石の祠は庭の正面、以前あった石段の上に運ばれて飾られ、まわりに梅の紋章の幕が張られ、御神体が祀られ、参道には絵どうろうが飾られました。入り口、大門の石の門の上には棒を渡してその上に大きなとうろうが飾られました。参道の中間には二三の中とうろうが地上に置かれました。参道の両側、壁面には小さなとうろうがいくつか飾られました。とうろうの絵は子供達が染料を使って、武者絵を描きました。

8　光岳寺　（建物のとし / だいたい 300 才〜250 才 / 江戸中期）

【本町】　27　を参照

9　柳田商店（約 120 年前のたてもの）

この建物は、明治 20 年ごろ建てられたものです。
この建物を建てた、初代・柳田茂十郎さんは明治の小諸を代表するような商人です。
畳表や雑貨などを商っていたのですが、いち早く店員に服をきさせたり、仕事の時間をきちんときめたりして、近

代的な経営をめざしました。いつも 30 人を超す奉公人がいましたが、その人たちが独立してお店を持てるように応援するしくみもつくりました。
この建物のまん中にそびえる物見やぐらは、初代・柳田茂十郎さんの商売の心意気をあらわしているのではないでしょうか。
柳田商店は、昭和 34 年に荒町通りを広くした時に店の前を１メートルくらい切ったので、平らなデザインになってしまいましたが、昔の写真を見ると、もとはひさしのふかい店（左がわ）と大きな店蔵（右側）が並ぶデザインだったことがわかります。
店の中に入ると、てっぺんまで通っている太い大黒柱、珍しい商品や昔の帳場、棚など、昔ながらのお店の様子が見られます。
現在、お店に立つご主人は、茂十郎さんから４代目にあたります。

10　みの屋の「うだつ」

この建物の２階の屋根の両側に乗っている、小さなカベのようなものを「うだつ」と言います。
もしもまわりの家が火事になっても、火が燃えうつるのを防ぐ役目をします。「うだつ」は、お金のある商家がつけたので、逆に「うだつがあがらない」という言い方に使われています。
この建物は、明治時代の終わりごろ立てられたもののようで、そのころは材木屋さんとして手広く商売をしていたということです。

11　酢久商店 / 小山家

「山吹味噌」の商品名でお味噌を作っているお宅で、奥の方に大きな工場があります。
この小山家は、今から 330 年くらい前、江戸時代の中ごろに「たまり」をつくりはじめ、味噌や醤油をつくるようなりました。その後、関東から仕入れた畳表、かつお節、茶、塩などを長野県内に流す問屋業としても成功し、小諸藩の御用商人として藩にお金を貸して、武士に近い身分を与えられました。明治になってからは、小山家は小諸のまちづくりのリーダーとして鉄道開通、製糸工場の建設などに取り組み、小諸の発展に力をつくしました。
今、この建物の入り口に立っている「御味噌」という立派な

看板には、凝った彫刻が施されています。
道に面した事務所(土蔵)とその奥のお宅は約200年前(幕末)の建物です。事務所は、最近またきれいに手を入れました。

12　牢屋小路(江戸時代)

江戸時代、この奥に罪人をとらえておいた牢屋があったことから、このように呼ばれるようになりました。江戸時代の絵図では、牢屋のとなりに牢番の屋敷があります。

13　嶋田屋(幕末/今から140年くらい前に建てられた建物)

これは、荒町の中でもとても古い商家です。
ほかの家は、荒町を広げた時に店の前が切られていますが、この建物はななめにたっているので、庇がよく残っています。
二階の窓が小さいのが江戸時代の商家の特徴です。江戸時代には、二階をつくることが禁止されていたので、物置きの小さい窓としてつけられたからです。
嶋田屋さんは、明治10年にこの建物を買い取って雑貨、荒物、下駄の問屋をはじめました。よい品物を選んで仕入れ、ていねいに商売をしたので、大繁昌しました。とくに嶋田屋でつくった下駄は有名で、広く関東一円から注文があったそうです。
このお店の奥には、すばらしいお庭とそれをながめる「はなれ」があります。

【嶋田屋と高橋平四郎】
この建物を建てたのは、近世には呉服商であり藩の御用足しをつとめた馬廻り格の豪商であった高橋平四郎です。高橋は、明治初期に小諸の製糸業を発展させた先駆者でしたが、明治14年のデフレにより家屋敷を手放し、その時に嶋田家がここを買いました。
建物は明治初期の小諸豪商の屋敷構えを伝えており、奥には美しい庭園と離れのお座敷があります。

14　よってけや(もとは平井商店)

この商家は、106年まえ、明治のはじめに建てられたものです。
明治、大正時代には繭の問屋で、小諸のまわりの農村から

農家の人が、繭の入った布袋をてんびん棒でかついできたということです。 店先で繭を買い、建物の奥に今もある３階建ての蔵に運び入れたそうで、とても景気がよかったそうです。
しかし、昭和はじめの大恐慌で繭がものすごく安くしか売れなくなってしまい、その後は米と粉を商う店、戦争のころ木工屋に商売を変えました。
今は商売をやめているので、平井さんのおばあちゃんが、「まちのために役立つなら」とお店を貸してくれて、「荒町銀座福徳稲荷会」のみなさんが、こんなすてきな歴史館として開いてくださっています。

15　銀座会館（ミルクホール）あと

よく見ると、窓や入り口がとてもしゃれたデザインの建物です。
ここは、昭和のはじめのカフェバーで、お店の名前は銀座会館（ミルクホール）といいました。
近所の若い人たちが、夜になるとそのころのはやりの服を着て集まっては、蓄音機で音楽を聞いたり、タンゴなどのダンスを踊ったりしたそうです。今７５才くらいの人が子どものころのことです。
この店をやっていた方が文化活動に熱心で、このホールに、そのころ「蝶々夫人」を歌って有名だったオペラ歌手の三浦たまきさんを呼んでコンサートをなども行いました。
太平洋戦争の後は、アメリカ兵がきたりしていましたが、昭和 25、6 年ごろ店じまいをしたようです。

16　山崎屋長兵衛商店（明治のはじめの建物）

建物は、明治のはじめのものです。
大正時代～昭和初期のモダンな時代に、荒町銀座会の周辺では店のおもてだけ洋風のデザインにすることがはやったらしく、おしゃれな窓や飾りのついた建物がいくつもあります。それは、その時代に銀座会がとてもはなやかな街だったことを伝えてくれます。
明治 38 年の「小諸商人繁昌記」には、山崎屋長兵衛商店は、かんざし、珊瑚、くし、香水、化粧品、きせる、などおしゃれ小物やアクセサリーを売る店で、お嬢様から芸者まで、また結婚式の時などもみんなこの店に買い物に来たと書かれています。建物が洋風になってからは、きっとおしゃれなお店にステキなものがたくさんならぶ、女の人がわくわ

くするようなお店だったことでしょう。

17　佛光寺

1600 年ごろ（江戸時代はじめ、今から約 400 年前）に、「法円」というお坊さんによって開かれたお寺です。このお寺には、こんな話が伝えられています。

このお寺が開かれたころ、今の群馬県太田市に「呑龍上人」というりっぱなお坊さんがいました。ある日、親の病気を直すために鶴をとらえて親に食べさせた孝行息子が、呑龍上人のところにかくまってほしいと逃げてきました。その時代、鶴を殺すと罪になったのです。呑龍上人は、いっしょに山をこえて、このお寺まで逃げてきました。そのころ、この寺を開いた法円上人は、山の岩窟で修行をしていたので、呑龍上人がこの寺に身を置いて小諸の人たちに仏の教えを説き、「呑龍様」とあがめられたそうです。そして、５年後に許しを得て、またもとの寺に帰っていったそうです。